

2016年度 アート・ドキュメンテーション学会年次大会 発表要旨集

6月11日シンポジウム「文化財と写真～現物と複製 その境界を越えて～」

【1】文化財としての写真-その記録性と継承-

講演者：高橋 則英

写真術はその発明当初より文化財の記録を担ってきた。我が国においてもその技術が渡来し実用化に至る初期の段階から写真による文化財の記録が始まっている。そのみならず、歴史や失われた事象を記録し文化財としての価値をもつに至った写真の記録性や、その継承の意義を述べる。

講演者：たかはし のりひで

1978年、日本大学芸術学部写真学科卒業。日本大学助手、専任講師、助教授を経て、2002年から日本大学芸術学部教授。専門領域は写真史、画像保存。2000年より小沢健志元教授の後を継ぎ写真史を講義。技術史にも重点をおき日本初の実用的写真術コロジオン湿板法の実験等も行う。

【2】「もの」としての文化財写真

発表者：田良島 哲

Resume:文化財の記録手段としての写真技術は、日本では明治初期から採用されており、歴大な成果物が伝わっているが、それらに対する関心はもっぱら被写体に集中し、写真自体がどのような形態をとっているかということに注目されることは少ない。本報告では、歴史的写真の存在形態の事例を示し、その記述方法について多少の課題を提起したい。

発表者：たらしま さとし

略歴：1959年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。京都府教育庁文化財保護課、文化庁文化財部美術学芸課を経て、現在、東京国立博物館 博物館情報課長。東京大学史料編纂所客員教授。

【3】文化財のデジタル画像とその品質

発表者：川瀬敏雄

Resume:文化財のデジタル画像の品質と一言で言っても、その目的により目標とする品質は大きく違う。また、この目標を具現・明示化することと、これを達成することはかなり困難である。多くの文化財のデジタル画像の品質は、発注者と受託者のコミュニケーションで成り立部分や、受託者の技量や裁量にゆだねられることも少なくない。デジタル画像の特質と品質ファクターを考えるとともに、デジタル画像の品質評価の一例を紹介する

発表者：かわせとしお

現職：(株)堀内カラー アーカイブサポートセンター シニア・プロデューサー

略歴：(株)堀内カラーに入社後、歴史資料の恒久的な記録、保存、運用を提案する「アーカイブサポートセンター」発足（1999年）とともに担当となる。以来、キトラ古墳壁画（特別史跡）、高松塚古墳壁画（国宝）の記録画像制作サポート、フォトマップ画像の制作、法隆寺 日本霊異記（国宝）の可視・赤外撮影、日光東照宮 本堂・拝殿（国宝）の障壁面のスキヤニングなど実施。

【4】デジタル時代の文化財と印刷

発表者：中上喜夫

Resume:紙にインクを付け大量の複製品を作り出す「印刷」という方式は、電子媒体の出現で縮小するといわれ、我々の事業もその波を受けている。従来からの「印刷」という事業が縮小する状況の中、デジタル印刷が、ようやく様々な機能を兼ね備えたサービスとして台頭してくることが予想される。 デジタル印刷とはどのような機能があり、文化財を記録しアウトプットする環境はどのように変化していくのかについて考察する。

発表者：なかうえよしお

現職：日本写真印刷コミュニケーションズ(株) 営業五部 部長

略歴：日本写真印刷にて営業として長らく美術館・博物館を担当してきた。営業として、関西歴史芸術文化遺産の3Dデジタル資源化とその活用を領域とする部門を担当し、「印刷」という事業の変化の中、常に施策を検討し、営業展開を試みているが、結果が得られていないのが現状である。今後の激しい変化に対し、抜本的な対策を模索中。

※上記に加えて、宮崎幹子氏の「仏教美術資料研究センターと文化財写真アーカイブズ」の解説をパネルディスカッションがあります。

6月12日 公募研究会

【1】ミュージアム・アーカイブズ資料としての独日航空技術文書について

発表者：筒井 弥生

Resume:スミソニアン協会航空宇宙博物館別館アーカイブズ所蔵の独日航空技術文書は、第二次世界大戦直後、米軍に接収されたドイツ軍と日本軍の航空技術文書のマイクロフィルム資料という。このうち日本の文書について、アーキビストとのインタビューで得た保存、目録、検索手段、内部用データベース作成などの情報を示し、日本所在資料との関連付けの展望などを考察する。

発表者：つついやよい

現職：一橋大学大学院非常勤講師、国文学研究資料館アルバイト 日本アーカイブズ学会登録アーキビスト、Certified Archivist

略歴：国際基督教大学教養学部卒業。

【2】経験のデザイン：文化財の高精細画像を活用した展示演出-雪舟の見た風景を探る-

発表者：向井知子

Resume：文化財原本の歴史的趣を味わう鑑賞体験とは別に、作品の高精細画像を映像展示に活用することで得られる鑑賞効果は、原本の展示だけでは気づきにくい造形上の成り立ちを可視化・触知化することにある。雪舟等楊筆《四季山水図巻》の高精細画像を、鑑賞者の身体的体験に配慮し、複数の拡大投影や高解像度モニター用に編集することで、肉眼や実物大での卷子装の鑑賞ではわかりにくい作品の魅力を引き出す展示デザインの方法論を探る。

発表者：むかいともこ

現職：日本大学芸術学部デザイン学科准教授

略歴：武蔵野美術大学卒業。ケルンメディア芸術大学大学院修了。東京藝術大学大学美術館美術情報研究室勤務を経て、現職。専門は、映像空間演出、コミュニティデザイン、美術情報学。美術情報に関する主なプロジェクトとして

は、展示企画に「資料は繋ぐ-名作と下絵・連作」展（東京藝術大学大学美術館、2005）、映像展示演出に、雪舟等楊筆『四季山水図』（国宝・毛利 博物館蔵）（山口県立美術館、2006、2009、2014、2015、山口市内、2010） 他がある。

【3】 歴史芸術文化遺産の 3D デジタル資源化とその活用

発表者：山口欧志・山路正憲

Resume：日本文化は技巧を尽くし意匠を凝らした歴史芸術文化遺産を数多く産み出してきた。根付や能面や陶磁器などがその一例である。これらは現在、広く国内外で収集され、デジタルアーカイブが進んでいる。しかし、3次元で記録する3次元デジタルアーカイブの例は少ない。そこで本研究では、ARCモデルのように研究者の誰もが導入可能な方法で歴史芸術文化遺産を3次元デジタルアーカイブし、デジタル資源として活用する仕組みを提案する。

発表者：やまぐちひろし

現職：立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員

略歴：中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程単位取得退学。総合研究大学院大学国際日本研究専攻博士（学術）。国際日本文化研究センター機関研究員、日本学術振興会特別研究員 PD を経て、2015 年度より現職。専門は景観考古学と文化遺産のデジタルドキュメンテーション。フィールドは、日本、モンゴル国、ウズベキスタン共和国。

【4】 研究アーカイブとデータベース：「研究来歴（Research Provenance）」の蓄積

本間 友

Resume: 慶應義塾大学アート・センターは、芸術資料を対象とするアーカイブの構築にあたり、資料が属する主題領域における、現在・過去の研究へのアクセスを提供する場の構築、すなわち「研究アーカイブ」の実現に取り組んできた。本発表ではその取組の中から、資料の研究史的コンテキストを明らかにし、資料と研究の関係を紡ぎ直す「研究来歴（Research Provenance）」蓄積の試みとそのデータベース上での表現を取り上げ、考察を行う。

発表者：ほんまゆう

略歴：慶應義塾大学アート・センター所員（アーカイブ、アート・スペース担当）、慶應義塾大学文学部・和洋女子大学非常勤講師。慶應義塾大学大学院（美学美術史、イタリア・ルネサンス研究）修了後、アート・センターにてアーカイブの構築・運営、展覧会の企画・運営に携わる。また、土方巽アーカイブの研究プロジェクト、ポートフォリオ BUTOH のコアメンバーとして、海外での上映会・展覧会の開催などを通じ、アーカイブでの研究成果の公開を行っている。目下の関心は ICT を活用した研究支援と学術情報の流通、および海外に向けた日本美術研究情報の発信。慶應義塾大学アート・センター ウェブサイト：<http://art-c.keio.ac.jp/>

【5】 専門分野別研究資源ポータルデータベースと相互リンクによるユーザビリティ

赤間 亮

Resume: これまで主に海外デジタルアーカイブ資料と自館収蔵品を対象としてきた立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）の研究資源データベースは、WEB 上に一般公開されたデジタル資源についても同じシステム内で閲覧、編集可能としたポータルデータベースへと進化している。本発表では、ポータルデータベースへの搭載にあたっての各機関の利用規約の現状やポータルデータベース化によるユーザビリティの劇的な向上などについて報告したい。

発表者：よみがなあかまりょう

現職: 立命館大学文学部教授・立命館大学アート・リサーチセンター副センター長

略歴: 早稲田大学大学院文学研究科芸術学（演劇）専修、博士前期課程修了、博士後期課程単位取得退学。早稲田大学

演劇博物館助手を経て、現在、立命館大学文学部所属。編著に『イメージデータベースと日本文化研究』（2010）、「文化情報学ガイドブック」（2014）など。デジタル・ヒューマニティーズ研究をアート・リサーチセンターを拠点に推進するとともに、海外に散在する浮世絵や古典籍を中心に日本の文化財デジタル・アーカイブが主要な研究テーマとなっている。

【6】文化財デジタルアーカイブにおけるメタデータ蓄積の効率化システムについて

山路正憲

Resume:本研究では、文化財画像データベースにおけるメタデータ集積作業において、より効率のよいシステムを開発することを目的とする。近年、様々な機関にて収蔵品を中心とした画像データベースの公開が活発になっているが、搭載される資料点数とメタデータの質を兼ね備えたデータベースを構築することは難しい。これを実現させるためには、参考となる資料へのアプローチを容易とし、作業効率をよくするシステムの構築が急務である。本発表では、立命館大学アート・リサーチセンターで開発しているリソースを活用し、Webシステム上で共同作業を行うことで、より効率よく質の高いメタデータ蓄積を行うことができるシステムを提案する。

発表者：やまじまさのり

現職：立命館大学衣笠総合研究機構 研究員

略歴：立命館大学文学部文学科日本文学専攻卒業。株式会社廣済堂 IT ソリューション事業部などを経て 2011 年より現職。立命館大学アート・リサーチセンターが運営するデータベース管理者、また映像スタジオ管理者として、同センターのデジタル・ヒューマニティーズ分野の研究支援活動を行っている。

【7】身装画像データベース<近代日本の身装文化>：画像データの特性と検索システムの構築

高橋晴子 丸川雄三

Resume:本身装画像データベース<近代日本の身装文化>は、当時の写真や広告等の他に、新聞連載小説挿絵の画像を採録対象としている。同時代の新聞連載小説挿絵は、写真では得にくい日常生活のあらゆる場面が再現されており、「身装＝身体と装い」の解説つき画像資料としての価値は高い。この価値の内容を具体的に説明するとともに、これら画像の特性を考慮したメタデータと近代の身装文化全般に関する「参考ノート」、ならびにシステム全般について述べる。

発表者：たかはし はるこ

現職：国立民族学博物館民族社会研究部 外来研究員

略歴：1971 年、神戸親和女子大学文学部英文学科卒業。2003 年、大阪大学大学院文学研究科文化表現論博士後期課程終了。博士（文学）。1974 年より大阪樟蔭女子大学衣料情報室にて、服装・ファッション情報サービス活動に従事した後、2001 年より教職につき、大阪樟蔭女子大学学芸学部教授を経て、2013 年に定年退職。専門は、身装情報の研究。現在、国立民族学博物館にて、MCD プロジェクトの代表として<服装・身装文化デジタルアーカイブ>を構築・公開。

発表者：まるかわ ゆうぞう

現職：国立民族学博物館先端人類科学研究部

略歴：2003 年、東京工業大学大学院博士後期課程（計算工学専攻）修了。博士（工学）。東京工業大学精密工学研究所助手、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授を経て、2013 年 10 月から現職。専門は連想情報学による文化情報発信手法の研究。これまで手掛けた主なサービスは、『文化遺産オンライン』、『国立美術館遊歩館』、『想-IMAGINE 早稲田大学演劇博物館』など。